

---

# パーフェクトビューティーガール！

春風みかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パーフェクトビューティーガール！

### 【Nコード】

N6095Z

### 【作者名】

春風みかん

### 【あらすじ】

あれが数値化された世界は、日々が闘争となっていた。

その世界では、自分磨きはは修行といえるだろう。

ある地区の頂点に立つガールは、女子高生だという。異例の快挙であった。その若さと美貌と卓越した技の数々は、今日も挑戦者を打ち砕いていくのだった。

「90……120……170……200オーバー……なんだ、この数値は」

「私の本気はまだこんなもんじゃないわよッ」

「なに……はッ 1000を超えた、だと!? 信じられない、そんなことがあっても……うわああああ!!!!!!」

「甘いよ。それと、一つ言っておくけど、今ので半分も力を出してないわよ」

「な……んだ……と ぐふっ」

「ふっ、勝利とはいったって空しいものよね……さ、夕飯の買い物続けましょう」

私の名前は花魁桜<sup>おいらんざくら</sup>、高校2年生。

平穩とは言い難い今日この頃だけれど、私は絶対に負けないわ。

この力で全てをねじ伏せてやるんだからッ!!

「おーい、桜ー」

「あっ、いつけない。今日は放課後に隣のクラスの桃ちゃんと一緒に喫茶店でハイカラな女子高生ごっこをするんだったのを忘れていたわ。御機嫌よう、桃ちゃん」

「なんでそんなに説明口調なのよ……」

「気にしないでよろしくてよ」

「んまつ、『よろしくてよ』なんて何処の貴婦人なこと、おほほほほー」

「うざッ」

「酷い!!! ノッてあげたのに!?!」

「あら? 桃さん、この角の埃は何かしら?」

「そ、それは……ワタクシの誇りでございましてよ!?!」

「上手くねーから」

「うん、ごめん。分かった」

「まあ、桃さん、この味噌汁の味は何かしら

む、殺気！！

そこかッ」

「うがッ……折り紙手裏剣とは、またレベルの高い武器を……」

「えっ、何！？ 桜、何が起きてるの！？ そのスカートの長い女子は誰なの！？」

「桃ちゃんは逃げて！！ こいつただ者じゃない、死人がでるわ！！」

「ホントなんだかよくわからないけど、とりあえず先生呼んでくるね」

「あっ、桃ちゃん！！！！」

私は背を向けて走り出す、桃ちゃんを咄嗟に呼びとめた。言い残した事がある。

桃ちゃんは急停止して、そして緊張を隠せない表情でこちらに顔だけを向けた。

私はそんな桃ちゃんに向けて、親指を天井に向けた。

「グッドラック！」

「うん……桜がね」

「食らえっ、ささがきミサイル」

「なぬッ……桃ちゃ」

「きゃああああ」

パタリ、と10メートルほど先に立っていた桃ちゃんが倒れた。

「なんてこと……なんてことをするのよ！！」

高速で牛蒡をささがきしながら飛ばしていくという、私もこれまでに見た事の無い技だった。

「くくく、邪魔者には消えてもらわないとね」

「なんてヤッ！！ 許さないわよ！！！！」

「イタタ。そもそも桜が私を呼びとめたせいだったような気がする

……」

「桃ちゃん、喋っちゃダメよ。傷に響くわ……」

「う、うん。ごめん、牛蒡の切れ端だから、さすがにダイジョ」

「桃ちゃん……ん……！！！！！！！！！！」

「ぐッ、ぐぼッ、うっ、ぐぼッ、えっ、ちょッ、待ッ、なんッ、そ  
んなッ、激しく、揺らさなでッ、私達ッ、友ッ、達ッ、だよッ、ね  
ッ、ぐはッ」

「よくも桃ちゃんをこんな目に合わせたな！！　こんなグツタリし  
た桃ちゃん初めてよ！！！！！！」

「……………うん、もう、  
なんでもいいや。ガクッ」

「貴様がこの地区で1番の力を保持しているという、花魁桜だな」

「そうよ、あなたは？　その制服は確か、楔アニメーション専門学  
校の生徒ね」

「ちげーよ……」

「あら、そう。ああ……じゃあ、あの、その、どっかのラップとか  
DJの専門学校の生徒ね」

「Yo！Yo！　メッ、　ッシ！　クラブワールドカップおめで  
とメッ！　まるでおまえはバルサのメシア！　メッ、　ッシ！

空腹の私、行ぐぜ飯屋！　Yo！Yo！」

「桃ちゃんああああん」

「聞けよコラ……」

「なんでよ」

「お前からのパスだったろ……」

「いや、だって、今のとか、ディフェンスがとりあえずクリアした  
ボールが偶然フォワードに渡りました、みたいなもんじゃん」

「くそっ、アタイを馬鹿にしゃがって……　タダじゃすまさねえ」

「弱い犬ほど良く吠えるうううううううううう……！！！！！！！！！！」

「ちょッ、うるさい　ちょッ、こら、おい、花魁桜、うるさい、

迷惑、きつと迷惑、居残りで勉強してる人たちもいるからっ」

「わんわん！！ きゃんきゃん！！！！！！」

「くそ、不意打ちでアタイの耳を潰そうって魂胆だったんだね、卑怯者が」

「なんとでもいいなさい。オールドスタイルの不良女！！」

「アタイは強いよ……」

「ふっ、そういう奴に限って純情乙女ってのが相場よ」

「なッ、ばッかー！！ ちげーよ！！！！ 男なんてなあ…… いちこるだよ、たぶん」

「へえ、そう。なら勝負はそっち方面でいいのね」

「そっち方面でどっちだよ」

「んー、すすきの？」

「ちょッ、ダメッつって！！ アタイはそういうのはガード固めてんだよ」

「ほおーら、見なさい。あんたはそっち方面の力は極端に低いのねえ」

「く、くそお。これだからモテる女子は……」

「あほほ。憎みなさい憎むといいわ。おほほほほほほほほ…… まあ、私も彼氏いないけど」

「いないのかよー！！」

「でも、私はその辺は妄想でカバーしているから大丈夫よ。見なさいこの溢れんばかりのオーラー！！」

「なッ！！ このオーラは…… 花魁桜、やはりあんたはただ者じゃないね」

「今頃気がついたの…… 掃除洗濯家事炊事、勉強運動裁縫料理、友情愛情と根性 全てを兼ね備えた私に勝てると思って？」

「く、くそっ…… なんて女子力」

「所詮、あんたはどんなに頑張っても女子力300で終わる器よ」  
「なんだと……」

「1歳で社会心理学を学び、2歳でスポーツ心理学を学び、3歳で

言語心理学を学び、4歳で教育心理学を学び、5歳で犯罪心理学を学び、6歳で数理心理学を学び、7歳で経済心理学を学び、8歳で交通心理学を学び」

「なんで全部心理学なんだよ……」

「そして9歳で社会心理学を学び」

「1歳で理解できてなかったんじゃん……」

「そして今、17歳にして帝王学を学んだ私はもはや無敵　女子力は900兆を超えたわ」

「す、すげー……日本の借金返してほしくなる数字じゃねーか」

「ふっふっふ。ここまで私の事を知っても尚挑もうというの？」

「く、くそ。最近ようやく餃子が上手く畳めるようになった私じゃ勝てないのか……」

「餃子（笑）……畳む（笑）………萌え」

「馬鹿にするんじゃないよー!!」

「そんなバンビーノが私に勝てるのかしらねえ、出直してきたほうが……なぬッ……」

「女にやあな、戦わねーといけねー時が……あるんだああああよおおおおお……!!」

合気道の構えから空手に移行、その後柔道の足車と見せかけてのグーパンチ。

「……!!」

状態を反らし寸前でかわす、私の女子力をもってすればその程度の打撃技を受けることは決してない。

反撃の狼煙は、既に挙げられている。

それはもう、グーパンチを見切った時に確定されていた。  
カウンター  
技が決まる事、そして

「私が勝つことだッ……!!」

「な………あ………う」

憲法を私独自の解釈により生み出した活人護身術。

拡大解釈から類推解釈までありとあらゆる手段で広げられた解釈

はもはや言葉の域を超える。

そして辿り着く……憲法は、拳法へと姿を変える。

《ウイイイイーナアアアッアー！！ 勝者はやはりこの人、花魁桜だああああ！！！！！！》

現れたヒゲの実況は、女子力ファイト公式委員会公認審判である。こうして私の勝利は、記録されるのであった。

「つ、つええ……」

立ちあがれない古風な不良スタイル女子が、跪きながら私を見上げている。

哀れ、いと哀れなり。

いや、しかし、光るものはあった。彼女ならまたきつと立ちあがるだろうという確信があったからこそ、私は出し惜しみせずに戦ったのだ。

「敗者は、女子力が零になる……また1から努力することね。そしてまた、私に挑みなさい」

「つたりめーだよ……次こそは、ぜってー負けねえ……」

「ふふふ、針の穴に糸を通すところから出直しなさい……アディオス」

この甘く、とろけるような味わい。

透き通るような香りを辺りにまき散らしながら飲む紅茶。

「なんてお上品なミルクティーなのかしら、ね？ 桃さん」

「そうですね、ワタクシのレモンティーも中々乙なものでしてよ、桜さん」

「桃さん、小指が立ってしましてよ。もっとお上品に」

「申し訳ございません、幼少よりの癖でしてつい。うふふ」

「じゃん、けん、ぽん。うふふふふ」

「先々週はグー、先週はパー、今週はグー、これらデータを見て分かる通り来週はチョキの可能性が高いですわね、おほほ」

「ですわね」

「でしてよ」

「「うふふふー」」

「.....」

「.....」

「..... いやぁー、てかさー」

「うふふふ」

「いつまでやってんのよ！！　そもそも、何でパックのミルクティになっちゃったのよ！？　しかもコンビ二の前で！！」

「桜さんが、変な人と戦っていたから日が暮れてしまったのではなくて？おほほほー」

「むー、飲み飽きたのにコレ.....」

「まあまあ」

「はぁ..... こんな時に役に立たないわね、女子力」

「この状態ってむしろ女子力マイナスなんじゃないの？」

「あー、まーね。でもこの状態でも上げよう思えば上げられるのよ」

「え、ウソ？　このパックティーに直接ストロー刺した状態で、しかもコンビ二の前なのに？」

「あー、まー、そーね..... 見たい？」

「うん。ちよつと興味ある」

「えーっと、ゴホン..... きゃ

るーん　みるくティー飲・ん・じゃ・う・ぞお」

「うわぁ..... 痛いけど、かわええ」

「別バージョン..... ハアハア、先輩　これ差し入れデス！！　疲れたあなたにミルクティー！！」

「うわぁ..... 爽やか青春CM」

「別バージョン..... あっ、ミルクティーが首筋に零れちゃったぁ。あなたが飲んでくれる？」

「せ、せせせ、せせせせセクシー！！！！」

「どうよ、この女子力」

「す、スゲーです桜さん！！」

「まあねー」

「うわー、この人、公衆の面前でスカートパタパタしてるー、一気に柄悪いー」

「ははは、努力の賜物よねー」

「ねえ、桜。私の女子力ってどうなの？」

「どしたの急に？」

「いやー、なんか気になるじゃない。今日みたいな事を目の当たりにすると」

「んー、そうねー。桃ちゃん小さい時に習いごとかしてた系の人？」

「習いごとかぁ……ピアノとお　えッ、ちよつと桜！？　ミ

ルクティー落ちてる、地面に落ちてるよ！！　あなた今ストロー啜えてるだけの状態よ！！！！」

なん……だと。ピアノだって？

幼少期にピアノを習う事が出来る、すなわちそれは家に結構お金があつた証ではないのか。

もしか、こやつ生粋のお嬢様だったのか……そんなはずはない、それならそれに相応しい高貴な女子高などを選ぶはず……なのだが。

「スイミングとお、習字とお、茶道とお、バレエとお　」

オールスターじゃねーか！！お稽古オールスターじゃねえですかね！？

「ピ、ピピピ、ピピピピアノってさぁ……」

「え、うん……」

「行つてたの？」

「ううん。来てたの先生が」

家ピアニスト！！！！　高貴の証、家ピアニスト！？

「でさぁ……え、桜？　桜！？　大変、桜がほとんど死んでる！！」

《ウィウィウィーナアアアッアー！！ この地区の新たな王者が誕生だああああ！！！！ 桃沢財閥の末っ子の桃沢桃だあああああ！！！！ 生粋の貴族が普通の女子高生に憧れたパターンだああああ！！！！ その女子力は1000兆を優に越えているうううううううううう！！！！！！！！！！》

「こ、これが……………パーフェクト……………ビューティーガール……………ガクッ」

『次回予告！』

「悪いけど、これで終わりよ……………桜！！」

「あなたの本当の心を取り戻して！！！！ 桃ちゃああああああああん！！！！！！！！！！」

儚い友情、夢見た結末。

そしてあなたは、消え去った。

《次回。ゝ昨日の友は今日の敵ゝ をお送りします》

**（後書き）**

ちなみに次回はありません。  
どもでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6095z/>

---

パーフェクトビューティーガール！

2011年12月20日14時56分発行